
ハヤテのごとく！殺人事件発生!?犯人はDaisyさん！

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハヤテのごとく！殺人事件発生！？犯人はDaisysさん！

【NZコード】

N7899D

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

有名私立、白皇学院の時計塔頂上にある生徒会室で殺人事件が起
こつた。犯人は一体誰なのか。

(前書き)

これは「らき すた殺人事件」に触発されて書いた只のネタ小説。
原作とは何の因果もありませんが、楽しんで頂けると幸いです。

白皇学院の時計塔の最上階に、生徒会室はある。

放課後、その生徒会室で、女性が頭から血を流して死んでいるのが、たつた今見付かった。

被害者は、白皇学院高等部、2年担任の桂雪路。
発見したのは、生徒会三人娘の瀬川 泉、花菱 美希、朝風 理沙である。

「ちよつ、桂ちゃんどうしたの！？」

驚いた瀬川が、雪路へと駆け寄る。

「何寝てるんだ、雪路？」

と美希。

「一寸待て。様子が可笑しいぞ」

朝風はそう言つて雪路に近付き、脈を計つた。しかし、既に脈は無かつた。

朝風は首を左右に振るうと言つた。

「死んでるぞ」

「何、これは雪路の悪ふざけじゃないのか？」

その時、エレベータのドアが開いて生徒会長の桂離菊が現れた。

「三人とも、そんな所に固まつて何やつてんのよ？」

「あ、ヒナ。実は」

その間に三人娘は、この事を正直に話した。

「……と言つ訳なんだ」

「何ですって！？」

ヒナギクは雪路の下に回り込み、死を確認すると持つていた書類を床に全てばらまいてしまつた。

その頃、教室では三千院家屋敷の主、三千院 凪が物騒な事を口にしていた。

「なあ、ハヤテー」

「何ですか、お嬢様？」

それに反応するのは、ナギの執事、綾崎 鳯あやさきである。

「殺人事件でも起きないかな？」

「何物騒な事言つてんですかお嬢様！？」

「いや、何か探偵気分を味わいたくてな」

と、その時、時計塔から「キヤア————！」と悲鳴が聞こえてきた。

（今の悲鳴はヒナギクさんの！？）

彼女の身を案じたハヤテは、陣風の如く生徒会室に駆け付けた。

「ヒナギクさん、どうしたんですか！？」

ハヤテが訊ねると、ヒナギクが胸に飛び付いて泣き出した。

「お姉ちゃんが、お姉ちゃんが！」

ハヤテはヒナギクを抱き締めながら、「先生がどうかしたんですか？」と訊ねた。

「ハヤ太くん、実はかくかくしかじかで」（注：雪路が殺された事を伝えます）

「えーっ、先生が！？」

ハヤテは驚き、倒れてる雪路を確認する。

雪路の頭からは血が出ており、その附近には血文字でDa Yuと書かれていた。

この事から察するに、雪路は最後の力を振り絞つてダイイングメッセージを残したのだろう。

そして残されたのが、

「ダイ？」

だつた。

「て言うか何なんですかこの□ンくんみたいな演出は？」

「演出じゃないよ。ホントに死んでるんだよ」

と瀬川が否定する。

「うむ。これは殺人事件だな。まさか本当に起きてしまつとは・・・」

「

そう言つたのは、ナギお嬢様だつた。

「お嬢様、いつからそこに！？」

しかしナギは、遺体を調べるのに夢中で聴いていなかつた。

「なあ、ハヤテ」

ナギが遺体を調べながら言つ。

「何ですか、お嬢様？」

「大至急、校内に残つてゐる奴のアリバイを訊いて来てくれ

「お任せ下さい！」

とハヤテが行こうとすると、ヒナギクがそれを制止した。

「お願い、一緒に居て」

「え、でも・・・」

「仕方ない。私が訊いてくる」

ナギはそう言つてエレベーターに乗り込んでボタンを押した。

ドアが閉まり、カゴが下降を始める。

(つて、私一人になつてしまつたが、不安だな・・・)

そんな事を思つていると、カゴが最下層に到着してドアが開いた。ナギはエレベーターを降りて校舎に向かつた。

一方、生徒会室では、ヒナギクが会長の席に座つて泣いていた。その傍らでは、

「それにしてもこの「Dai」は一体何なのだ？」

と美希が顎に手を当てて考え込む。

同時にヒナギクが立ち上がり、エレベーターに向かつて行く。

「外の空氣吸つて来るわ」

そう言つてヒナギクはエレベーターに乗り込み、ボタンを押してドアを閉めた。

「ハヤ太くん、ヒナに付いていてくれないか

美希がハヤテにそう言つ。

「今のヒナは何するか判らないからな

「解りました」

ハヤテはそう言つてヒナギクの後を追つた。

「キヤアアアア！」

突然、校内に悲鳴が響いた。

(今のは、ヒナギクさん！？)

ハヤテは悲鳴の聞こえた場所を手指した。

そこは、自分たちの教室だった。

「ヒナギクさん、一体何が！？」

「な、ナギが・・・ナギが！」

教室の入り口に腰を抜かして座っていたヒナギクが、やつて來た

ハヤテにそう言つて指を差す。

ハヤテがその先を確認すると、首に黄色いリボンを巻かれて倒れているナギの姿が在つた。

ハヤテは慌てて駆け寄り「お嬢様！」と抱いて声を掛ける。するとナギが目を開けてハヤテを見た。

「お嬢様、一体何が遭つたんですか！？」

ハヤテの問いにナギは、疑問符を浮かべて問い合わせ返した。

「誰だお前は？」

「えつ・・・・？」

固まるハヤテ。

ナギはハヤテの記憶を失っていたのだ。

(落ち着けハヤテ。こう言う時は・・・)

「あの、お嬢様。」自分の名前は解りますでしょうか？

「お前はバカか？当然だろ。私は三千院 凪だ」

(名前、クリア！)

「では、お嬢様のお歳は？」

「9歳だ」

(マジですかー！？)

ハヤテは驚いて内心で叫んだ。

(つて、そんな事より)

ハヤテはヒナギクの方を向き訊ねる。

「ヒナギクさん、怪しい人物とか見てませんか？」

しかしヒナギクは「見てないわ」と首を横に振るつた。

ハヤテはナギに向き直る。

(頼みの綱はこのお嬢様だけか。しかしお嬢様は記憶を失つてゐる。一体どうすれば……)

ハヤテが悩んでいると、ヒナギクが声を掛けて来た。

「ハヤテくん、生徒会室に戻りましょう？此処に居てはいつ犯人に襲われるか分からぬし……」

「そうですね」

ハヤテはナギをお姫様抱っこして立ち上がつた。

「なつ、お前何をするのだ！？」

ナギは暴れてハヤテのお姫様抱っこから抜け出した。

「仕方ありません」

ハヤテは拳をナギの鳩尾に埋めた。

「うつ！」

ナギは呻き声を上げて氣絶し倒れた。

ハヤテはそのナギを再度お姫様抱っこし、ヒナギクと共に生徒会室に戻つた。

「あら、三人とも何処行っちゃつたのかしら？」

生徒会三人娘が生徒会室に居ない事に気付いたヒナギクをさう言った。

ハヤテはナギをソファに寝かせながら答える。

「もう帰つたのではないでしょうか」

「えー！？」

「シーツ、お嬢様が起きます

「あ、ごめん。で、何でそう思うのよ？」

「それは何と無くですよ。そんな事より、今は↙D a ↘の意味を解読しないと……」

「そ、そうね……」

ヒナギクはハヤテの言葉に顔を顰めるとそう言った。

「んー・・・」

ハヤテは顎に手を当てて唸る。

(クソ。Daiって何なんだ、Daiって)

ハヤテはふと横目でヒナギクを見る。

(確かに、雛菊は英語でDaisy・・・って、まさかな)

「ん、何かしら?」

ヒナギクが自分を見られてる事に気付き訊ねる。

「否、別にDaiが実はDaisyで訳すと雛菊だから犯人がヒナギクさんだなんて思つてませんからね!」

「はあ?」

何を言つてるんだこの人は、と言いたげな顔でヒナギクはハヤテを見詰める。

それと同時にナギが「Dai」と寝言を発して起き上がった。

「Daisyだ!犯人はDaisyだぞハヤテ!」

「お嬢様、僕の事思い出したんですね!?」

「何を言つ。私はお前の事など忘れてなんかおらんぞ」

「え、でも先刻は」

「あれは演技だ。側に犯人が居たからな。そつだろ、ヒナギク?」
とナギがヒナギクに顔を向ける。

「えつ?ナギ、私を疑つてんの?」

「当然だ。て言つか、お前が犯人では無いか

「どう言う事です、お嬢様?」

「教えてやろう。あの時、私が教室でDaiの意味を考えると、ヒナギクがやって来たんだ。そこで私はピンと来たんだ。先生はDaisyと書こうとしたんじゃないかつてな。で、ヒナギクに言つてやつたんだ。『お前が犯人だろ』つて。そしたらヒナギクの奴がいきなり私のリボンを奪い取つて、それで首を絞めてきたんだ」

ナギが真剣な表情でそう言った。

ハヤテはヒナギクを見詰める。

「どうしてですか、ヒナギクさん？」

ヒナギクは俯き、徐に口を開いた。

「口封じよ」

「え？」

「ナギは気付いたのよ。Ra・iの意味に。だから危言をされた前に殺そうと思つて」

「どうして先生を殺害したんですか？」

「それは

とヒナギクが事件当時の状況を語り出す。

それは、お昼休みの事。

ヒナギクが生徒会室で弁当を食べると、雪路が慌ててやつて来た。

「ヒナえもーん、お金貸してー」

「何でよ?」

「お昼よ、お昼買いたいのよー。」

「そんな事言つて、どうせまたお酒なんでしょ?」

「なつ、姉の言つ事が信用出来ないのか。なら力尽くで奪い取つてやるー!」

言つて雪路はヒナギクの懷に手を突つ込んだ。

「一寸、やめなさい!」

ヒナギクは必死に抵抗するが、雪路も負けじと必死に財布を抜き

出やうとする。

そこでヒナギクは、咄嗟に机に置いてあつた水筒を取り、それで雪路の頭を思いつ切り殴り付けた。

「うー!」

雪路は呻き声を上げ、床に倒れた。

「お姉ちゃん!/?」

と、その時、雪路の頭から赤い液体が出て来て床に広がった。ヒナギクは怖くなり、弁当と水筒を持って生徒会室を跡にした。

「と詫ひ詫ひ

全てを話し終えたヒナギクは、立ち上がりつてエレベーターの前に移動する。

「ハヤテくん。私、自首するね」

「そうですか。何か、寂しくなりますね」

「うん。あ、そうだ」

ヒナギクがハヤテの眼前に移動し、接吻をした。

「なっ！？」

と驚くナギ。

「好きよ、ハヤテくん。私が務所から出て来たら、付き合ってくれる？」

「ヒーナーギークー！」

とナギが絶界の様な紫色の禍々しいオーラを放ち、目を赤く光らせながらヒナギクを睨み付けた。

「ハヤテは私のもんだ！誰にも渡さん！」

「え、二人は付き合つてんの？」

「何言つてんですか、ヒナギクさん。僕はフリーですよ？それに、僕は同年代から年上が好みですから、お嬢様の様なお子様には興味ありません」

「何！？ハヤテ、あれは、あの時のお前の気持ちは嘘なのか！？」
と、その時、雪路が「五月蠅いわね」と起き上がる。

「お姉ちゃん？」

「先生、生きてたんですか？」

「勝手に殺すな！」

「お姉ちゃん、これはどう言つ事！？」

「ああ、これね。これは演技よ」

「演技？じゃあ、頭の血は？」

「それは血糊」

「脈が無かつたのは？」

「コップを脇の下に挟んでただけ」

雪路は服の内側から脇の下に挟んでいたコップを取り出し

た。

「 「 「 紛らわしいわ！」」」

三人はぶちギレ、雪路を吹っ飛ばした。

「あれー！」

雪路はバルコニーから外に吹っ飛び、放物線を描いて落下して行つた。

「一寸吃驚させようと思つただけなのに、何でこいつなるの？..」

おしまい

(後書き)

やっぱ最後はこう言うオチ。

本当はヒナギクが犯人で務所送りにするつもりだったんですが、あの雪路がそう簡単に死ぬ訳が無い。雪路の生命力は冷蔵庫の裏で力サカサ動く黒いホタル科の虫並、と思ってこう言う展開にしました。以上、評価・感想お待ちしてます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7899d/>

ハヤテのごとく！殺人事件発生!?犯人はDaisyさん！

2010年10月8日10時31分発行